

第20回
テーマ

経営者こそ大学院へ

青森公立大学大学院経営経済学研究科

(博士前期課程・博士後期課程)

青森公立大学大学院経営経済学研究科長 大矢 奈美

社会科学分野の大学院には社会人も多い

「大学院で学んでいる人」と聞いて思い浮かべるのはどんな人ですか？学部を卒業後、さらに専門知識を学んでから企業の技術開発に携わろうという人、研究を続けて大学教員を目指す人、などでしょうか。

実は、社会科学（経営学や経済学など）分野の大学院生のうち、約4割を社会人が占めています（文部科学省「学校基本調査」）。

彼らが大学院で学ぶ理由には、専門的な知識を身につけたい、人脈作り、学生時代から興味のあったことを学んでみたいといったものがあるでしょう。そして、社会人として仕事をしている中で芽生えた疑問や課題を解決したいという理由。これは社会人ならではの理由であり、強みでもあります。現実社会とのかかわりの中で生まれた問題意識を持っているからこそ、解決策を模索する過程で、専門的な理論の意味するところを実感できる。理論や学説は1つではなく、同じ事象に対する説明も研究者によって様々です。それらの背景には何があるのか、なぜそう言えるのか。色々な角度から「なぜ」を繰り返すことによって、問題を解決するための深い知識や考え方、ものの見方を身につけ、仕事にも活かすことができるのです。

日本は人材への投資が足りない？

近年、「学びなおし」が注目を集めています。国際

情勢を含め社会の変化は激しく、ICTの発展も目覚ましい中で、今後、求められるようになると予測される知識やスキルを学ぶ必要があります。こうした人に対する投資こそが労働生産性を向上させるカギになると考えられます。しかし、厚生労働省「平成30年版 労働経済白書」が示す通り、日本のGDPに占める企業の能力開発投資額（OJTは除く）は先進諸国の中で圧倒的に低い。しかも縮小傾向にあります。（ちなみに、OJT実施率もOECD平均を下回ります。）

これは、学位の取得者数にも表れています。図1は人口100万人あたりの学士号取得者数、日本で言えば大学4年間を修了した人の数です。日本は、英国や韓国、米国ほどではありませんが、ドイツやフランスよりも多くなっています。図2は、同じく人口100万人あたりの修士号取得者数、大学院の2年間の課程を修了した人の数です。驚くことに、日本は図中の6か国の中で最下位。特に人文・社会科学系は学士号を取得した人の数と比べて、修士号を取得した人がかなり少ない。博士号取得者の数も同様です。

つまり、他国では人文・社会科学の高度な専門知識を学んでいる人たちが日本よりもずっと多いということです。労働経済白書の情報と合わせて考えると、他国で修士号を取得した人の一部は企業等に勤めている人と推測されますから、企業における高度な知識を持った人材の育成も、その割合も、日本は後れをとっている可能性が高いと言えるでしょう。

図1 学士号取得者数(人口100万人あたり)

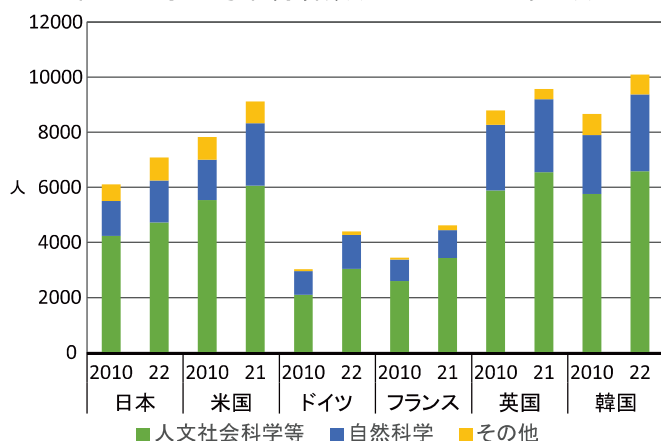
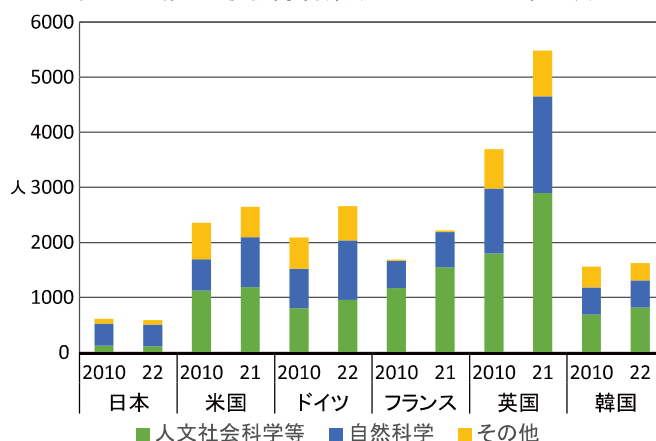


図2 修士号取得者数(人口100万人あたり)



(出所) 科学技術・学術政策研究所「科学技術指標2024」

経営者の「学びなおし」がもたらすもの

前述の労働経済白書では、日本は「業務を遂行するにあたって労働者の能力不足に直面している企業の割合」が先進諸国中で最も多いことも報告されています。人への教育投資の状況を考えれば不思議ではありません。こうした状況を打破するには、やはり人に対する投資を進めること。そして、人的投資によって社員が身につけた知識やスキルを評価し、活かす場を作っていくこと。処遇面への反映も必要でしょう。

そのためにも、まず、組織のリーダーである経営者が「学びなおし」に取り組むことが大切ではないでしょうか。仕事で培った経験は貴重なものです。しかし、一方で、こだわりが生まれ、考え方が固定されてしまうリスクや社会の変化を見落としてしまうリスクもあると言われています。「学び」から得られる知識によって、新たな発想を持ち、変化に対応していくことができるかもしれません。何より、経営者みずから「学び」に対して積極的な姿勢を見せれば、社員もまた学びに取り組むでしょうし、それが仕事のやりがいにもつながります。労働生産性が向上すれば給与に反映させることもでき、仕事のやりがいとあわせて若者の離職を防ぐことも期待できるのです。

私たちは、経営者の「学びなおし」には、人材育成や人事管理の方法、業界の動向分析、消費者行動の把握など、経営学や経済学が得意とする分野が有益ではないかと考えています。次ページで、青森公立大学大学院経営経済学研究科で修士号を取得した足立さん、現在修士論文を執筆中の千葉さんという2人の経営者のお話を紹介します。経営者が大学院での学びで何を得ることができたのか。是非、ご覧ください。

青森公立大学大学院 経営経済学研究科

青森公立大学には、経営経済系で修士号が取得できる大学院博士前期課程と、博士号が取得できる博士後期課程があります。研究者を目指す人の他、地域の課題解決のため、社会人の方も学びやすい教育環境を整えています。

研究指導においては、主査1名のほか、異なる分野

を研究する教員2名も副査として参加します。これは、社会の課題は、経営学、経済学など、1つの視点からではなく、複数の視点から考える必要があるという青森公立大学開学以来の理念に基づいたものです。

①柔軟な修了年限：長期履修制度

時間に制約のある社会人に配慮し、博士前期課程では2年分の授業料負担と同額で最長4年まで、後期課程では3年分の授業料負担で最長5年まで在学することができます。時間をかけて学ぶことができるだけでなく、1年あたりの授業料負担を軽減することもできます。

②授業時間（夜間開講、土曜日開講）

大学院では、受講生と教員が相談の上、6時間目（18時～）、7時間目（19時40分～）や、土曜日も使って授業をおこなっています。また、一部、アウガ（まちなかラボ）での対応も実施しています。

③遠隔授業の活用

業務の状況によっては大学まで来ることが難しい場合も考えられますので、遠隔授業も活用して対応しています。

このほか、社会人特待奨学生制度や、東青地域や青森県内にお住まいの方に対する入学金の減免制度などもあります。大学院での学びを試してみたいという方には科目等履修生制度もお勧めです。修得した単位数は、大学院に入学後に卒業要件単位として認定されます。また、統計分析に関する科目を学びやすい授業料でパッケージにして、最短1年間でデータ分析士を養成する履修証明プログラムも用意されています。

詳しくは、青森公立大学事務局までお問い合わせください。

～お問い合わせ～

青森公立大学事務局

教務学事グループ 入試・就職チーム

〒030-0196 青森市大字合子沢字山崎153-4

直通電話：017-764-1532・1601

Eメール：nyuusi-t@mat.nebuta.ac.jp



2025年度選抜・第Ⅱ期募集のお知らせ

12月9日（月） 社会人向け選抜説明会（アウガ・夜間）

12月14日（土） 選抜説明会（青森公立大学 大学院棟）

2025年

1月20日（月）～1月31日（金）出願受付期間（土日除く）

2月8日（土） 試験日（前期課程は口述試験のみ）

2月14日（金） 合格発表

地方における経営者の事例紹介

足立 弘長 さん

(青森公立大学大学院経営経済学研究科

博士前期課程 2022年度修了)

株式会社 神戸屋呉服店 代表取締役

足立さんは、青森公立大学大学院でポーターの経営戦略論を学び、彼が提唱した5フォースの観点から和装産業を研究されました。大学院での学びはどのように仕事に活かされているのでしょうか。

大学院に進学したきっかけ

以前から、呉服産業にある「謎」を解明したいという思いがありました。たとえば同じ商品なのに、当社がより安い価格で提供しても大手チェーンを選ぶ消費者がいる。ブランドか、営業手法の違いか、消費者行動は何によって決まるのだろうか。そんな時に青森公立大の先生の出前講座に出席する機会があり、経営学や経済学を学べば答えの一つが見つかるのではないかと思います。

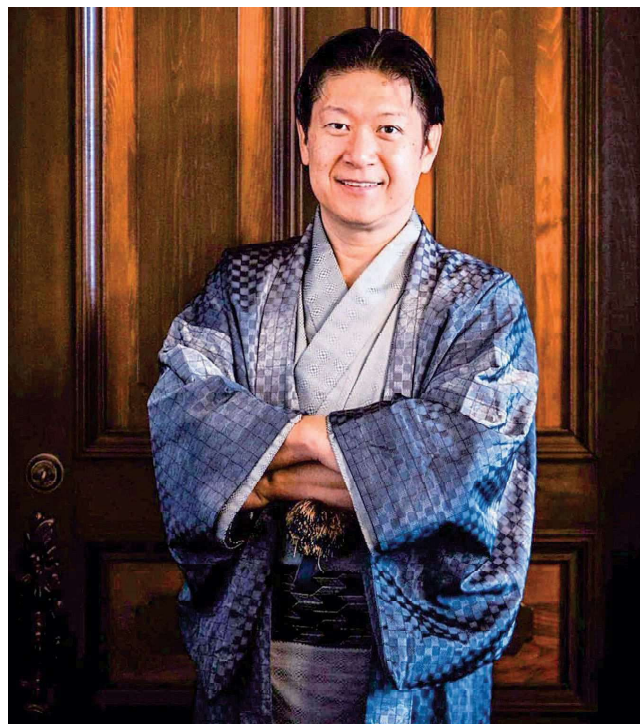
振袖に対する消費者の意識・行動の変容を研究

大学院では、伝統文化にも詳しく、地域の産業・企業の経営戦略を研究されている生田泰亮准教授から指導を受けました。

修士論文では、振袖を対象を絞り、若者の消費行動を研究しました。振袖は世代によって意識が違うという点でも興味深い対象です。成人式の振袖を購入するか否か、どこで買うかは、先輩や親の意見に影響される面もあります。たとえば祖母の世代では成人式以外にも結婚式などで3、4回着る機会があったので1着誂えても……となるわけですが、母親世代は成人式以外に着る機会が無かった方も多く、レンタルでいいよね、と。娘さんも着物に込められた技術や技法にこだわらず、写真映えするものをレンタルできれば良いと考える。このような消費者意識の変容があるのです。いわゆるポーターの「購買者の圧力」の部分になるわけですが、この他にも「新規参入の脅威」としてメルカリなどのライバルも登場しています。こうした「圧力」という視点から和装産業全体の構造を分析し、業界や自社が生き残るための戦略を考察しました。

学んだことは仕事に活かされている

消費者の世代による意識の違い、行動の変化を受け、供給側も情報発信のツールを変えていく必要があります。現在は、DMや新聞広告よりも、SNSでの発信や、自社の情報をインターネット検索の上位に表示させることを重視しています。



消費者のニーズも多様化しました。情報検索が容易であるということは、消費者が自分の目的にあった店を選ぶのが容易であるということなので、売り手側には差別化への圧力になります。しかし差別化し、消費者の一部を対象にしたビジネスを進めることが良いことなのか否か。

大学院では複数の先生から指導を受けました。経営学に限らず社会科学の理論や研究手法を学んだことで、今、起きていることを分析するだけでなく、背景にあるものを見極めようとする習慣が身につきました。また、自分の経験にもとづいた考えにこだわらず、様々な意見を比較検討して、取り込んでいくことができるようになったと思います。

研究を通じ、理論をベースにして、論理的に分析し、自分の考えを組み立てる力が培われたと感じています。研究の過程では様々な先行研究にあたる必要があるのですが、その分野についての専門知識も得られました。おかげさまで、ビジネスの場で著名な研究者の名前が出てきても、名前だけで気圧されることもなくなり、冷静に対応できるようになりました。

経営者の方へのメッセージ

朝4時に起きて課題をこなすなど大変でしたが、研究は楽しく、刺激的でした。長期履修制度を利用すれば、仕事との両立も十分に可能だと思います。授業料を3年間(4年間)で分割して納付することもできます。私の場合、在学期間がコロナ禍に重なったこともあり、この分割納付は特待奨学生制度の利用とあわせて大変助かりました。

経営者としての経験があるからこそ、学んだことが深く理解できる。それを活かすこともできる。皆さんも疑問の解明に取り組んでみてはいかがでしょうか。

千葉 英三 さん

(青森公立大学大学院経営経済学研究科
博士前期課程 2024年度修了見込)

有限会社 テック 代表取締役

千葉さんは、現在、大学院長期履修の3年目。
バーナード理論をもとにして、地域薬局の
役割についての研究を進めています。

大学院に進学したきっかけ

コロナ禍で、それまでのように都内のセミナーに参加することができなくなりました。オンライン研修も少しずつ増えてはいましたが、やはり対面での学びの方が自分の意欲を維持できると思い、普段の活動エリアで探していたところ、新聞広告で青森公立大学大学院の選抜説明会を見つけました。

私は薬学部出身ですが、薬局の経営を通じて、いつか経営学を学ぶ必要があると思っていました。身近な場所で学べること、長期履修制度など働きながらでも学びやすい環境があることを知って、挑戦することになりました。

組織のリーダーとして、学びは必要

組織の経営者、リーダーとして、新しい発想や生き残りのための戦略を生み出す余力というか、知識の蓄えが必要だと考えています。そういったものが枯渇しないよう、学ぶ機会を大切にしてきました。

とはいえ、経営学は初めてです。青森公立大の先生のアドバイスも受けながら関連文献を読んで研究計画をたて、合格後は入学前指導で分厚い本を読んで準備しました。

また3年間の長期履修を決め、2年間は単位をとることに注力しました。3年目の今年は藤沼司教授の指導を受けながら、研究を進めています。科目の履修は大変でしたが、研究に必要なものだけでなく、院生仲間に誘われて興味を持った科目も履修しました。県立保健大学大学院との単位互換科目にも刺激を受けました。新しい分野を学ぶのは大変楽しかったです。

研究テーマは、薬局の生き残り

持続可能な組織であるために薬局はどうあるべきなのか、というのが研究テーマです。調剤薬局がどのようにして地域薬局になっていけば良いのか。薬局の事業継続は、従業員の雇用を守ることだけでなく、薬局を利用される地域の皆さまにとっても大切なことだと思います。

1年生で履修した組織論特論は印象的でした。組織構造に関する基本原理や組織における個人の協働を高めるためのモチベーション、リーダーシップなどを学びましたが、仕事を通じて経験してきたことが見事に

理論的に説明されており、先生の話は「そのとおり！」と言いたくなることばかりでした。腑に落ちると言うのか、非常におもしろかった。あの時うまくいかなかった原因はこれか！と気づくことも多く、仕事の上でも大変参考になりました。修士論文でも、バーナードの組織論などを用いて研究しています。

学んだことを従業員にも還元

年に1、2回ですが、自分が学んできたことを使って社長塾を始めました。ころよく大学院に送り出してくれている従業員にも還元したいと思ったからです。

組織論は仕事に活かせるものが多い。これまで「仕事」、「人」の単位で見てきたものを、「組織」として見るようになりました。店舗はもちろん、プロジェクトチームも目的を一つにする公式組織であり、そう見た時に足りないのは何か、コミュニケーションか、モチベーションなのかといった視点で分析する力がついたと思います。

経営者の方へのメッセージ

仕事の経験があるからこそ、実感をもって学んだことを自分のものにすることができる。一方で、経験が長くなると、どうしても同じ業界・職種での見方に偏り、視野が狭くなってしまうように思います。様々な知識に触れ、学問として普遍的なものの見方を探求することによって、変化への対応力が養われるのではないのでしょうか。

